昭和60年5月1日発行　㈶高知市文化振興事業団

文化高知 5

〝美しさ〟に思う

藤田　司

『名もなく貧しく美しく』という映画は、小林桂樹と高峰秀子が口の不自由な夫婦の愛情を演じて、心に刻み込まれる作品であった。戦争に敗れて焼け野が原になった日本が急速に立ち直っていた昭和三十六年度の作品である。

かつて世界列強を名乗った日本は一挙に転落したが「名もなく貧しい」国民は、それでも「美しく」生きたいと念じていた。いまもそれは変わらないであろうが、町には巨大な建物が立ち並び、衣食足りた時代になりながら、「美しさ」、「清らかさ」は影をひそめつつあるように思われる。

自分の身の回りは美しく装いながら、自分に直接利益のないもの、公共の場には心を配らない人たちがふえている。『気配りのすすめ』という本が爆発的な売れゆきを示し、「気配り」は流行語になってしまったが、これは「自分への気配り」であったのか。

この春高知大学を退官された岡林清水教授のお話だが、かつて「いこじ」、「いごつ」ともいわれた「いごっそう」は、内攻的で自我心が強く、他人とは妥協せず、非社会的な人間を指すものであった。一途な道をきわめることでもあったが、よい意味に使われることは少なかった。それが戦後には、よい意味での土佐人気質に変えられてしまった。「いごっそう」には二面性があり、これは土佐人の持つ二面性をも象徴するものだというのである。

言葉や言葉の持つ意味は、時代や環境とともに変わってゆくものである。「いごっそう」の変化に不満をのべても始まるまい。ここで問題なのは、土佐人の持つ二面性の、一方のよからぬ面が時代の変化とともに強まっているのではないかということである。

「衣食足りて礼節を知る」は人間の本質にかかわるものだと思う。ところが、衣食足りるようになって桂浜や五台山、高知公園から公衆便所にまでチリはあふれている。チリには塵埃（じんあい）の哀れさが感じられるが、飲料水のビンやカン、折り詰めの食べ残しまでを含めた廃棄物、それを事もなげに投げ捨てる人には、「ぜいたく」に汚染された人間の汚らしさを感じるのである。

数年前、高知放送ではラジオキャンペーンとして「クリーン缶（カン）ペーン」を二年にわたって実施した。乳と蜜との流れる里にあらず、ジュース流れる町や野にあふれる空き缶集めの運動であった。缶をつぶす機械を発明した人や企業の協力などもあって成果をあげたが、運動が終わればまたもや空き缶はあふれている。

土佐人がよき「いごっそう」ならば、街を徹底的に美しくする「いごつ」に徹してもらいたい。口角泡を飛ばすだけの一言居士では「美しく」はならない。飽食家の汚物は醜いものである。文化都市をめざす市民なら即刻行動に移って、物心両面での美しさを実現してもらいたいと思う。

（高知放送 代表取締役社長）

「小　仏」　濱口富治

土佐で過ごした青春

木津川　計

丸の内高校の三年生になった春、集団検診があった。さらに精密検査を受けたら結核であった。

その頃、家族は故あって関西に四散、僕は一人で五台山に下宿していたのである。自活していたから貧しかった。

自転車で学校へ通う朝はミカン水のカラ箱を積んだ。帰りは中身の入ったミカン水を三箱積んで戻る。重たかった。高校への行き帰り、駄菓子屋さんの運搬をアルバイトにしていたのである。

それだけでは食べかねる。だから近所の中学生数人の家庭教師をつとめた。そんな無理がたたり、夏休みには右肺に空洞ができていた。入院するにも金はなく、保険もなく、僕は野垂れ死にする以外になかった。

いっそこの夏に死のう、と思って戦中の疎開先、大栃へ一人で行った。四、五日を死に切れず、山の中の百姓屋、そこの納屋で悶々としているとき友人が三人、どこをどう訪ねてか励ましにやってきてくれた。眼鏡をかけた長身のY君は北条民雄の『命の初夜』について話してくれた。民雄はハンセン氏病で療養所に入った。そこで見た地獄であるが、民雄はそれでも生きようと決意するのである。

「おまん、死んだらいかんぜよ」と繰り返し、繰り返し言ってくれたのはN君であった。もう一人は女生徒のSさんだった。何も彼女はいわず、僕の衣類を涙ぐみながら洗濯してくれるのであった。

やさしかったSさんはどうしているか。N君はいま高知郵便局に勤める鍋島秀穂君であり、Y君は綜芸塾の塾長山川禎彦君である。

一夜明けて彼たちは山を降りていった。見送りながら僕は生きようと思った。病む肺をいたわりいたわり、高校を卒業した翌日、五台山から自転車に乗り、山を二つ越えて、国立高知療養所へ入院した。自転車の荷台に僕を乗せ、喘ぎながら山の道を運んでくれたのは高校の野並先生であった。先生は勤評闘争を闘い、闘いつかれて、のち比島の山の中で自ら命を断たれた。

大阪にいた父が、働いているということに僕を仕立て、健康保険証を送ってくれた。それが偽りの証であることを知りながら国立高知療養所長は黙認し、所長回診のたびに『チボー家の人びと』を読みなさい、といって肩を叩いてくれた。のち高知市長になられた坂本昭先生であった。僕の命の恩人である。

療養所は元陸軍兵舎であった。木造の解体しそうな病棟であったから、実際、一病棟づつ壊され、建てかえられていった。解体作業が始まると、五台山から百姓のおばちゃんたちが人夫として働きにくるのである。

ある日、おばちゃんたちが七、八人、僕のベッドを訪ねてくれた。「おまさん、可哀想にねえ……」と言って、おばちゃんたちはみんな泣いてくれるのであった。

「わたしらが来ている間は差し入れするきにねえ」と言われ、翌日から指定された場所へ安静時間があけて行くと、卵やさつまいもが置かれてあった。毎日毎日、おばちゃんたちは何かを置いてくれているのであった。十代の終り、僕にもあった『足摺岬』である。

右肺の一部を切り捨て、僕は退院した。二年間の療養生活であった。それから三十年が流れ、僕はもう五十歳になったのである。今は何もかもが懐しい。

戦争が苛烈化、大阪大空襲のあと、僕ら家族は母の故郷高知へ京都から疎開したのである。十代のすべてを僕は高知で過ごした。つらいことの思い出ばかりであるが、支えてくれるいい友人が、先輩が、先生が僕にはいた。

わけても丸の内高校で佐藤いづみ先生を存じ上げたよろこびは大きい。そこばくの理解が文字におもむくとしたら、それはすべていづみ先生の影響である。いつか、どこかで、いづみ先生の教え方を詳しく詳しく語りたい。

生きて還りし人の羨しも
藍色のネクタイなどしめて働く

ひとり身の先生の詠まれた切ないうたである。先年、大阪でお会いした。二十五、六年ぶりであった。ちっとも変らない先生であったが、襖を開け、対面するや、先生は、「まあ、まあ、まあああ――」と何回も何回も言われた。無理もない。少年のとき以来のめぐり会いであったから。先生、お元気で――。

そしていま、僕は『上方芸能』という、しがない雑誌の編集長をつとめている。苦しいことに出会うたび、僕は十代の終わりの、もっと苦しかった土佐を思い出し、希望をまさぐるのである。

（『上方芸能』編集長／大阪市在住）

シェルブールの雨傘

和田　均

先日、テレビロードショウで、久しぶりにイングリッド・バーグマンの『カサブランカ』を見た。第二次世界大戦、ナチスドイツの嵐が吹き荒れたヨーロッパと北アフリカを舞台に、歴史にほんろうされてゆく男女の出会いから別れ、バーグマンの愁いを含んだ美しさに心が強くいたんだ。『凱旋門』にしても、恋人をゲシュタポに殺されてフランスへ不法入国した名外科医ラビックと、バーグマンの、出会いから楽しい日日、そして悲しい別れと、まさに人生の機微を表現した素晴らしい名作だと思う。最後の名文句「戦争が終わったらフーケでまた会おう」、「どっち側だ」、「シャンゼリゼ通りだ」。この言葉の中に、ヨーロッパの人々の、戦争はいつか終わる、という戦争終結への確信と新たなる出発への息吹を感じとることができる。

少年の頃、父に連れられ初めて洋画を見た。オードリ・ヘップバーンの『ローマの休日』である。あの王女の清らかさ、アイスクリームをほおばる愛くるしさ、まさに少年の日に出会った幻の女性であった。学生時代に見た『ブーベの恋人』、クラウディナ・カルディナーレ、カトリーヌ・ドヌーブの『昼顔』、ミュージカル『シェルブールの雨傘』。今になっても全て私の心の中に鮮明に残っている。愛し合いながらも、歴史の波に流されてゆく運命、多感な頃、人知れず考え悩んだものである。

ヨーロッパを旅した折、フーケに座りカンパリを飲んでいると、まるで主人公になったような気がした。そんな気ままな名作の旅をすることがことのほか楽しい。

仕事にもその影響が出て来る。洋菓子の高級フランス菓子の店を出す時、店名とシンボルマークはすぐ決まった。「シェルブール」、マークは相合傘の中に男女の向かいあったシルエットと。シェルブールへも、いつか旅して訪ねてみたいと思う。あの映画の中に、王様のガレット（ガレット・デ・ロア）というお菓子がでてくる。菓子の中に小さな人形が隠されていて王冠がのせてある。小さな人形が入ったのが当たれば、その日のパーティーの主人公になり、王冠をかぶり全ての人々を命令に従わすことができる。そんなお菓子もシェルブールで売ってみたいと思う。

学生時代に、油絵を書いていた先生からよく言われた。「良いものを見なさい。優れたものを見て、感性が養われたら、優劣は自然につきますよ」。この言葉は今でも印象に残っている。外国を旅した時は必ず美術館、博物館へ寄る。そこにその国の文化と歴史を感じることができる。多くの文物に触れ新しい知識を得、そうした体験を積み重ねることから、自分が相対的にわかってくる。そこに独りよがりではない、独自の地域文化の風が吹くのではないだろうか。

（株式会社青柳代表取締役社長）

ねだん

英保迪恵

四月十八日、高知市にオープンした高知おもちゃライブラリーには、よいおもちゃがあるが、その一つ一つは高いという。しかし、高知大学の鳥居昭美教授は教育上の配慮をした玩具が高くなるのは仕方がないと解説された、という新聞記事を読んだ。

日常生活で、特に主婦はお金の出し入れが多いので、高い、安いの言葉には敏感だが、人によってその基準なり評価なりが異なることもよくわかる。

高知市内に高いと定評のある青果商がある。同じ文旦でも他店より高いと言われるが、本当に〝同じ〟文旦だろうか。名前や外見は同じでも中身が違うのではないか。

本屋で子どもに本を選んでやっている母親を見かけた。「これは分が薄いに高い」、「それは絵ばっかりで字が少ない。読むところがないに千二百円もする」など言っていた。

わが家の場合、二人の息子は手近かにある物でよく遊んだ。かまぼこの板やちくわの竹、王冠や牛乳びんのふたなど、創意工夫で楽しく遊んでいるのをみると、これはもう立派なおもちゃであり、価値があった。そう考えると、先のおもちゃも〝高い〟のではなく、活用法によっては安くさえなるように思う。

幼児は親の財政を考えず味本位で物を食べるので、生食する果物は多少値が張っても好むものを買わざるを得ない。それでも残さず食べると一概に〝高い〟とも思えなくなる。身体の糧になるのだから。

ましてや本となると中身第一である。面白い本は繰り返し読む。その面白さが心の糧になると思えば、他の支出を控えてもまたよい本を買いたいと思う。たとえ定価は高くても実質は〝安い〟と計算するからである。

ヒトはどんな計算をするのだろう。行政が財政難になると文化費が先ず削られるという。「安物買いの銭失い」ならまだしも、こと文化に関しては失うものは大きく、取り返しがつかないことが多いことも考えなければならない。

（主婦）

日本語の変化

高橋顕志

共通語にテイルという接辞がある。

僕は、今、ごはんを食べテイル。

この時、テイルはごはんを食べるという動作が進行中であることを表現している。

荷物が届いテイル。

この時のテイルは、荷物が届くという動作、作用が既に完了してしまっていることを表現している。

我々が、中学校の英語の時間に、苦労して覚えた進行と完了を、共通語では同じテイルという語形で表現している。この二つの区別をなかなか覚えられなかったのも、共通語による、つつある・てしまった教育だったからかもしれない。

おおむね西日本方言では、この進行と完了を明確に区別して表現している。高知方言の例をあげよう。

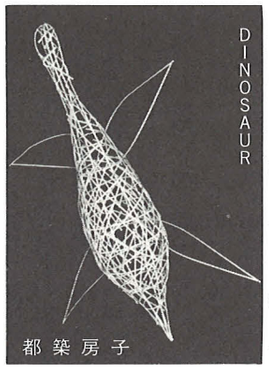
ごはん、食べユー。……進行

荷物が届いチュー。……完了

このように、高知では、ユー・チュー、で明確に区別することが出来る。幡多では、ヨル・チョル、愛媛と香川では、ヨル・トル、徳島県東部では、ヨー・トー、その他、ヨウ・チョウ等、語形に多少の差はあれ、この区別は明確である。

しかし、この進行と完了の区別が今、若い層を中心として、消えつつあるようだ。愛媛では、

今、ゴハン食ベトル・ケン待ットッテクレ（今、ごはんを食べているから待っていてくれ）



のように、進行の場面にトルが使用されはじめた。香川、徳島からも、若い世代でこのような言い方が行われはじめたことが報告されている。高知では、まだ聞かないが、これも時間の問題だと考えられる。

この変化は、進行と完了の区別をしないという点において、共通語化の一つの現象と見ることが出来る。

方言は、語彙の部門において、既に大きな変化をとげてしまった。そして、今や、時をどうとらえ、どう表現するかという、根本的なところでも、大きな変化を起こしつつあるようだ。

一方、現在、東京を中心として、電波によって放射されてくる日本語を聞いていると、今まで我々が規範として来た共通語そのものも、大きな変化を起こしていることに気付く。

たとえば、よくとりあげられる問題ではあるが、可能をあらわすレル・ラレルの使用についての例をあげよう。

「この肉は、生でタベラレル」と言うところを「タベレル」と言い、また「この時間に帰れば、あの番組がミラレル」と言うところを「ミレル」と言う言い方が、最近、電波を通して広まりつつある。言葉に細心の注意を払うことを要求されるアナウンサーでさえ、時にこの言い方をすることがある。また、その言い方は、雑誌の見出しとして、さらに新聞記事の中に、文字として定着しはじめてきている。

レル・ラレルには、受身、尊敬、可能、自発の四つの意味があるとされる。具体的な言語生活の場面では、今、それがどの意味で使用されているか、瞬時に文脈により判断される。意味の弁別に文脈が百パーセント関わっている。とらえようによっては、誤った解釈を生むことだってあり得る。

それに対して、現在広がりつつあるタベレル・ミレルの言い方は、可能を表現する場合にしか使用されない。そのため、文脈によることなく、その語自体で可能の意味を了解することができる。また、その分、タベラレル、ミラレルの文脈依存度も低くなってくる。どちらの言い方が合理的であるか、火を見るより明らかである。

また、この合理的なタベレル、ミレルの言い方を、方言として従来から持っていた地域も多い（高知方言など）。この言い方が勢力を持ち、広まってゆくにあたって、このことも重要な要因になったと考えられる。

進行、完了の例に見られる、方言の根幹にかかわる共通語化。また、レル・ラレルに見られた方言の共通語への昇格。この相反する現象を見て、我々は、もはや方言とか共通語とか言う言語外的条件による範疇が無用のものであることに気付く。

また、共通語イコール優者、方言イコール劣者という従来の考え自体、再検討を要する。共通語文化圏と方言文化圏のそれぞれの経済、社会、文化、（これらは、等しく言語そのものではない）の優劣によって、共通語と方言の優劣が云々されて来たのが実状なのである。

今、日本語は、共通語、方言を含めた大きなうねりの中で、かってないほどの変化を見せている。国語史的に見ても、平安時代以来一千年かかった変化と同程度の変化が、あるいはそれ以上の大規模な変化が、戦後四十年間で起こってきている。これは、ことばの自律的な変化だけでなく、それを運用する人間、さらに人間の集団である社会の大きな変化と連動するうねりなのである。

現在のことばの状況を、一部の人は乱れていると批判するが、もし乱れているとするならば、それは人間と社会の乱れがことばの世界に反映しているのである。私は乱れているとは考えない。それだけ自由な形で、ことばの再生産がなされているのだと考える。

ことばをなりわいとする者として、この大きな日本語のうねりの中に生き、その様子をまのあたりに見ることを至福とし、このうねりを見極めることを天命と感じる。

今年度から、高知市文化振興事業団の学術研究助成制度の適用を受け、高知市という一つの地域社会が、どのような言語状況のもとにおかれ、四周にどのような影響を与えながらことばを変化させているのかについて考えて行きたいと思っている。

（県立高知女子大学国語学教室助教授）

まちづくりと文化

中内茂

昭和五十五年十月、台東区立下町風俗資料館が東京上野公園下に開館した。明治、大正の商家と長屋、路地をそのまま再現した館内はそれなりに楽しいが、もう一つ感銘深いものに来館者用の感想文を書く備え付けのノートがある。この種の感想帖の例に洩れず、ヤングのイラストや子供達の落書きめいたものが大半ではあるが、その中にあって恐らくは他人に読んでもらう文章など滅多に書いた事の無かったであろうと思われる中高年齢層の人々が驚くほどの真摯な文章で切々と記しているのが目立っている。

「亡き父の面影偲ぶ資料館」という一句のみを残した初老の男性、「遠い昔に死んだ筈の母が丸髷姿でそこに立っているような気がして泣いてしまいました…」という中年女性の文章などを読んでいると、ついこちらの目もうるみ勝ちとなって来る。

この館では再現した長屋などの座敷に自由に上り込み、配置されている生活用品を手に取ってみることに何の制限も無い。長火鉢の前に坐り込み煙管をくわえようが、お望みとあらば便所（断じてトイレではない）の戸を開けて中にしゃがみこもうが自由だ。このようなシステムでは恐らく展示品の「事故」も無い訳ではないだろう。しかしそれにも増して、生活、文化というものの正しい伝達は直接その空間に我身を置き、肌で感じ取る以外に不可能だという認識が生かされている。そして、取りも直さずこの事実が初めてペンを握るような人々に思いのたけを綴らせる力となっているのだろう。

ところで、オスカー・ニーマイヤーのブラジリヤ建設はいささか極端な例としても、昨今の都市計画が必ずしも住民に快適な生活を提供しない場合が数々ある。理由は幾つかあるだろうが、ごく素朴に考えると何よりも都市についての計画者達が実際にはその土地の生活者で有り得ないということではないだろうか。このような疑問に対する一つの回答として『人権回復のまちづくり理論』なる一冊が出版された。かつて高知市を含む県内同和地区の環境整備事業を計画した若竹グループなる東洋大学都市計画研究室の建築家集団が、後に若竹まちづくり研究所として高知市に落ち着き、その成果を問う一冊である。

被差別部落の解放を目指すまちづくりという目的で書かれた恐らくは最初の研究書であるという点からの評価はそれに相応しい方面の人にゆだねるとしても、この六章、二五二ページからなる内容を読む途中で絶えず思い起こされたのは、あの下町風俗資料館の粗末なノートに記されていた文章の幾つかであった。

それは、まちづくりの計画者としてのこの集団が、基本的な立場として、自らがそのまちに住み着き、生活者となり、更に同じまちの他の生活者達と肌を接し合い、意識を共有する所から出発するという点から呼び起こされたものであったに違いない。

このように、一見愚直かつ迂遠な方法の実践のみが、生活者にとってのまちづくりという本質に結びつくのだという信念が読む者に迫って来る。特に県下H地区での具体的な実践の試行を総括した「実践的まちづくり理論にむけて」と題する章は感動的ですらある。

まちづくりとは、本来、技術の次元ではなく、文化の問題に他ならない。日本でも都市計画の技法として多く用いられている区画整理法が、計画者側からすれば完成度の高い有効な技法であるのに対し、生活者にとって必ずしも好評でないという問題がある。

私自身にとって、この疑問を解く為の最高の参考書となったのは一見全く関係の無い『ラインの河辺』、犬養道子著、中央公論社刊、であった。この本によって、区画整理法がゲルマン社会の文化と分かち難く結び付いているが故にドイツでこそ発展した技法であること、そして日本では正に「文化的」になじみ難い部分を抱いていることが見事に浮かび上って来る。繰り返すが、まちづくりとは一にも二にも文化の問題なのだ。

「洗濯機と冷蔵庫がひとつ屋根の下に暮らしても……」で始り、延々二十六分十秒唄い続けられる河島英五のレコードアルバム「文明」シリーズの最終曲、「心から心へ」はただ凄い歌だとしか言いようが無い。しかし、この詞と曲を彼が高知で書いたことは割合知られていないように思う。昭和五十五年にこれを書いた時か、あるいはそれ以前かは判らないが、彼が高知公演に来ていた時のこと、中村市でのコンサート後、高知市に向かう汽車に乗れず、車で56号線を走った。丁度その途中激しい雨に会った……といったことをラジオで語っていたのを偶然耳にした事があった。

もちろん曲のモチーフはずっと以前からあったのだろうが、それを形にまとめるだけのインパクトがこのような体験を通じた高知にあったということが、繰り返し曲を聞くと何となく判って来るような気がする。それは何度となく同じ道を走った私自身の感性のどこかに納得する所があるからだろう。

かつて東京からやって来た若い建築家達がそのまま高知に住み着き、何人かは家庭を持ち、研究所を開設し本を出した。彼等にとって、何故高知だったのだろうか。そうさせたのは高知の何であったのだろうか。この本と同じ時期に出版された上田篤著、『流民の都市とすまい』、駸々堂刊、は雑多な内容を含んでいるが、紛れも無く京都というまちから生み出されたという背景がよくわかる。

私はここで若竹まちづくり研究所にぜひ今回の本の続編を書いてもらいたいと願う。高知の文化と結び付いた生活者としてのまちづくり論がその時にこそ提示されるであろうから。

（高知市厚生課課長補佐）

FIGHTER ONE
都築房子

手しごと一筋（二）

尾戸窯元 土居庄次さん

文　西岡寿美子
写真　岡崎禎広

見初める、ということがある。

場所もどこだったか覚えていない。繁華街を歩いていて、何気なく陶器展へ入ったのである。もう十数年も前になろうか。そこで人を、ではなく茶碗を、見初めたのである。

一楽（らく）、二萩、三唐津、という。茶道界で佳品とされる、大方はぼってりと肉厚な茶碗を豊潤と呼ぶなら、ここで見たものは何と表現すれば当るだろうか。着物なら夏物の紗。花ならケシ。

鋭い手である。こうまで均質な薄さにロクロを挽くことは、誰にでもできることではない。高台（糸尻）の作りも尋常ではない。ただ、薄さのあまり、たぎる湯を注ぐ時、受ける手の灼ける懸念はある。それにしても、危くかたちを成り立たせている口縁の絶妙さは、十数年後の今でもありありと目にある。

展示会は、もう一度見ている。これは今から五、六年前である。この時は茶碗、水指、建水、香合等の茶陶以外に、絵つけされた大小様々の花器が大量に出品されていた。偶然に入った会場だったが、すぐにわたしは大きく成長した、あの「茶碗の挽き手」に再会したことに気付いた。かつての射るような才気にも魅かれたが、それ以上に、この時の円熟と豊麗を好もしく見た。そして、やはり凡手ではなかったこの人の上に流れた、歳月の厚みを思わずにはいられなかったものである。作者の名は、土居庄次さん。

高知市西郊の能茶山は、承応二年（一六五三）に、山内藩のお庭焼として、摂津の陶工久野正伯を招き、城北小津に開窯した時から陶土の採取場であったし、文政三年（一八二〇）には窯そのものもこの地に移っている。標高二六・六メートル、周囲一キロ足らず。山というよりは丘と呼びたいこんもりとした隆起である。この小丘の南面にある尾戸窯の開窯は昭和初年。土居庄次さんは、祖父、父につぐ三代目の窯元である。

ご本人に会うのははじめてだが、話をするうちに、十数年前の展示会は、土居さんの初展であることがわかり、ふしぎなご縁で、わたしはこの人の出発の姿――しごとに出会っていたことになる。

土もみ三年、ロクロ七年、といわれる陶業界であるが、近年は土づくりから一貫して手がける人はすくなくなった。尾戸窯は、今でも自家の持ち山からの採土である。「あと二代や三代は充分ある」という採土場は、窯からわずか五十メートル。三代にわたって切り取った断面は、背丈の四、五倍もあろうか。掘り下げた穴には水が溜り、壁面のそこここには、冬のことなら枯草がそよいでいる。素人目にはとても陶土とは思えぬ荒涼とした荒れ土である。七、三に石を多く噛んだ土肌はほぼ代赭色だが、帯状の黒い層や、白土の層もある。識者によれば、このあたりは秩父帯の中でも比較的新しい虚空蔵山層群に属する砂岩層で、黒いのは樹木の腐蝕土なのだそうである。いずれにしても一億万年を前後する大昔に出来た地層のことだから、人間の感覚では漠々としたものである。土居さんは、生土を見た時からつくるモノを考えるといわれる。

石混りの山土は、掘り取って水簸（すいひ―水漉し）する。流水で漉される土は、粗いものから緻密なものへ、順次埋めたカメの中へ沈澱する。これを木箱に上げて、ロクロにかけられる粘りと固さが出るまで、水と空気を押し出す作業が土もみである。

五分刈り頭。陽やけして一見野武士のような風貌をもつ土居さんは、蹴ロクロを足で蹴って、目の前で高台を削る。生乾きの土鉢をロクロ台に伏せ、回しながらクイクイとこそげてゆく手は、思いのほかに太い。格別器用そうにも見えない。しかし、モノが置かれたのを見て、その手の容易ならぬ鋭さに気付く。高台を削られ、櫛目文をつけられて、見る間にカマチに並んでゆく土鉢は、高さ、口径、文様まで、寸分違わず、物差を当てても、恐らく一ミリとは狂っていまい。

焼けば一〇パーセントから一五パーセントは収縮する土質を見込んで、ロクロは幾分大ぶりに成型するそうであるが、収縮率の大きいほど、また、薄づくりであるほどユガミ、ヒビワレが出る率も高い。十数年前に、すでに茶碗の縁辺をあれだけの薄さに挽き、あれだけ尖鋭、端正に焼成した技の持主である。その上に、一窯で五割、優品だけをとるなら一割、というきびしい選別の上販路にのせる品の出来ばえの、悪かろう筈がない。

工房には、作りためて窯入れをまつ花器や食器が、たくさん棚板に乗っている。土肌のもの、素焼されたもの、絵つけされたもの。薄暗い棚で、それぞれの丸い肌が、ほのぼのと白い。庭には釉薬ガメが並んで、流しかけたウワグスリが筋をひいて乾いている。

陶器づくりは、一に焼き、二にクスリ、三がかたち、だそうである。焼くのは、今は主として三房の登り窯。松材で焼く。松材は樹脂があってよく燃え、炎の伸びがよく、灰になり易いので煙道をふさがないし、灰釉の利点もあるからである。工程の最後に火をくぐってみてコトの成否が判然とするのは、思えば苛酷なことで、人力を超えた偶発性にかなりの部分を賭ける、ということでもある。

クスリはユス灰、ワラ灰等の草木灰を主に使う。呉須、コバルト等で描かれた尾戸独得の図柄、松竹梅、雲鶴等の下絵が、上品に発色するのはこのウワグスリによる。ユスの木は県内では幡多郡、大半は宮崎ものが入る。この木は鉄道の枕木に使われてきた木だそうである。

人が大きく開眼、変容するためには、何かがある。もともと資質に恵まれていたとはいえ、初展時と現在では土居さんも別人の観がある。昭和十二年生まれの丑年。今年の歳男だからたとえるのだが、若さと才気にまかせた土居さんの、かつての猛牛の角をためて、円熟に向かわせた人は誰か。また、自ら悟るところなら、どんな転期からの勇猛心かを聞いてみたい。

十九の時に、と、土居さんは語ってくれた。言葉はトツトツとして質朴だが、心は大きく、熱いものを持ち、意志も強いと見た。ロクロの手は休めない。十九の時に、ふくさとふくさ挟みを買いに行ったそうである。茶陶を志すならまずお茶を知る。使い勝手のわからぬ者に道具は作れないからである。行った先が茶道具店のうさぎ屋（本町）で、先代（故三野卯三郎氏）と出会ったことが、土居さんの今日を決定したといえる。

白面の十九歳の青年にとって、稀代の目利きであったうさぎ屋さんは、実に怖い人であった。持ち込むもの、持ち込むもの、遠慮会釈のない酷評をうけた。置くな、とは一度もいわれなかったが、意に満たぬものは商品とは見ない、という顔色が歴然と読みとれ、腸は煮え返るように思っても、この人のメガネに叶わぬ限り、自分の腕の未熟さを恥じねばならないのは、土居さんにもわかっていた。隠忍と精進のほかはなかったのである。

当初は独りだったが、まず義兄の筒井勇さんが加わり、次いで実兄の幸雄さんもUターンした。筒井さんは絵つけを主に受け持ち、この人の南画風な細密な下絵を得て、作品は高雅な華やぎを加えた。

京焼の仁清（にんせい ― 生没不詳。江戸初期）の流れをひくという、尾戸焼三三〇年余の伝統を正しく継いだ土居さんの茶陶が、日本列島を北上しはじめて、すでに久しい。土佐「尾戸」の評価も確実に定着したようである。

工房の南方は人家を見はるかして田園が、裏山の咲き始めた椿と竹林には陽が輝く、いかにも時代を感じさせるのどかな陶器の里である。どこに住み、何を業としても、生きることはきびしいが、手も足も土につけ、同胞扶け合って家業を守りたてつつ、「土」の恵みをじかにうける幸せを、土居さんは十分知っておられる筈である。「息子も後を継ぐ気らしい」と語る時、土居さんの顔はやさしくなった。それは先刻道で出会った、かわいらしい少年のことだろうか。次代はどんな「手」を持って現われるか。これも楽しみなことである。

財団購入図書から

財団では、次の図書等を昭和五十九年度に購入しました。貸し出しはできませんが、事務局でご覧いただけます。

日本風景画集成
監修　井上靖・河北倫明
発行　毎日新聞社

改訂日本の絣文化史
著者　福井貞子
発行　京都書院

中世屏風絵
編集　大阪市立美術館
発行　京都書院

能具大観（上・下）
著者　山口蓼州
発行　芸艸堂

平戸染付の文様
監修　水町和三郎
発行　美乃美

在外日本の至宝（全十巻）
発行　毎日新聞社

解説版新指定重要文化財（全十二巻）
編集「重要文化財」編纂委員会
発行　毎日新聞社

日本文様類集（全八巻）
編集・発行　芸艸堂

内外文様類集（全十巻）
編集　河原崎奨堂
発行　芸艸堂

季朝の民画（上・下）
編集　志和池昭一郎・亀倉雄策
発行　講談社

名物裂
監修　山邊知行
発行　毎日新聞社

江戸庶民の染織
著者　浦野理一
発行　毎日新聞社

春日野（復刻版）
歌・書　會津八一　絵　杉本健吉
発行　求龍堂

文化庁監修　国宝（全十五巻）
発行　毎日新聞社

日本の染め色（全三巻）
染色監修　吉岡常雄
発行　紫紅社

工芸による古典文学意匠
編集　京都国立博物館
発行　紫紅社

ガウディの宇宙
写真　細江英公
発行　集英社

ガウディを〈読む〉
著者　中山公男ほか
発行　現代企画室

ガウディ讃歌
著者　粟津潔
発行　現代企画室

三世代遊び場図鑑
編集・発行
子どもの遊びと街研究会

脈脈　盛岡の街づくり
著者　佐藤優
発行　在研究所

文化への道しるべ
―そのアセスメント―
編集・発行　岡山県

文化誌日本　高知県
編集　上田虎介ほか
発行　講談社

都市の個性とはなにか
著者　田村明
発行　岩波書店

廣漢和辞典（全四巻）
発行　大修館書店

日本国語大辞典（全二十巻）
発行　小学館

子ども、大人、生き生きと

高知東・西・南・北・中こども劇場

子どもたちの育つ環境を何とかしなければと、やむにやまれない気持から十四年前に高知市に生まれたこども劇場も、今では市内を五地域に分割、それぞれ、東、西、南、北、中こども劇場の名称をもって、独自の運営をはじめています。

これは、より多くの子どもたちを視野に入れた活動と、地域の中での子どもの集団作りのためには、そうするのが一ばんいいと思ったからでした。

〝生のお芝居や音楽は、大切な心の栄養です〟という大きな柱〈例会活動〉は五劇場みんなで支え合い、地域にみ合った創造的な活動〈自主活動〉は、劇場ごとでどんどん自由にひろげましょうと、事務所も小さいながら、その活動の中心となれるように、五ヵ所に置いて、若い専従事務局長ががんばっています。

城西公園にて「夜まつり」

中学生グループの劇

月額会費、一人八五〇円は、決して安い額ではないかもしれませんが、例会のほかに、子どもをお客さんにしない、子どもたちの手による楽しい活動をいっぱい行い、母親たちも、のびやかに子育てについて語り合う場づくりなど、子どもの文化のことは、とかく一ばんあとまわしになりがちの状況の中で、自分たちの手だけですすめる運動には、いつも財政的なきびしさはついてまわります。

でも、分割してちょうど一年、生き生きとして集まってくる新しいお母さんたちもぐんとふえ、視線は、自分の子どもから、全ての子どもたちへと、自然に向かいつつあるこのごろです。

（会長　浜田陽子）

連絡先　高知こども劇場協議会
電話　㉓８６４９

軌　跡

高知のまちづくりを考える若い建築家集団

高知県建築士会青年部に集うメンバーが中心となり、建築家の立場から高知県の住宅問題を論議して、(財)高銀地域経済振興事業団の懸賞論文「高知県民の住宅問題を考える」に応募したことがこの集団の結成の契機となった。昭和五十七年の春のことである。期日ぎりぎりにまとめた論文は、幸い佳作に選ばれた。

入選祝いの席の雑談で、こういう意見が出た。「僕ははじめて高知に来たとき、はりまや橋や坂本龍馬誕生地を訪れることに期待の胸をおどらせた。しかし、そのいずれの地にもがっかりさせられた。高知の人はこれらの貴重な財産をどうして、もっと大切にしないのだろうか。また、もう少しどうにかならないものだろうか。建築家の立場からそれらの空間計画を考えてみたい」

メンバーには県外出身者も多い。みんなガッカリさせられており、この意見に賛成である。また、高知県人としても、今のはりまや橋をこう言われてもやむをえない。

こうして、はりまや橋をどうにかしようということになった。会合は毎週一回以上、仕事の都合をつけて夕方から集まり、議論をし、図面作業などを行った。ときには外が明かるくなったことも何度かある。

昭和五十八年五月にやっと、〝はりまや橋周辺整備基本計画〟をまとめることができた。この計画は、思わぬところで話題になったり、賞賛されたり、無視されたりしたが、高知市の都心のまちづくりを考える上での基本となったことも事実である。

その後、高知東ロータリークラブほかの援助を得て、『高知駅周辺整備基本計画』に取りかかり、今年一月に完成した。これで、高知市の都心と拠点地区のまちづくり計画をほとんど網羅したといえる。

しかし、この二つの計画も時間的な制約や紙数の都合があって、十分に言いつくせてないところや検討不足のところも多いと反省している。今後とも、会員十一名とともに活動を続けてゆきたい。（代表千頭輝雄）

朝倉の歴史を記録する会

山脇　茂美

朝倉には、ジョヤマ遺跡、宮ノ奥朝倉古墳などが散在し、往古より開けていたことがわかる。中世には、穀倉性と戦略上の重要性から、本山氏と長宗我部氏の争奪の地となる。

近代が押し寄せてきたのは明治中期の連隊設置で、良田は軍用地に転用され、家屋敷は立ち退きをせまられた。以来、逐年軍都化の途をたどり、転住者の利便のために曙町には商店が栄え始め、住民の日常生活も変貌してゆく。

敗戦直後は進駐軍が駐屯し、表面に出ないトラブルも発生した。進駐軍が去ってしまうと、朝倉は学都化の途を歩み始める。同時に高知市の膨張にともなって都市化やベッドタウン化も進行する。それに土佐道路の開通が拍車をかける。

変転きわまりない朝倉である。今、祖先の歴史的な歩みや生活文化は急速に失われつつある。この危機感から昭和五十二年に七名の有志が集まり「朝倉の歴史を記録する会」が生まれた。そして、朝倉に関する基礎資料となる『索引朝倉の歴史研究』を、会員の奔走、外部の協力者、朝倉農協のバックアップで昭和五十九年に刊行した。これは朝倉に関する歴史資料を五十音順に目録化し、村史や地方史を作る布石としている。

しかし、意欲はあっても寄り合い世帯であるこの会は、会員の病気や財政的な行き詰まりから破綻を生じ、目下休息状態となっている。が、活動が跡絶えたわけではなく、個人レベルで地域に密着したテーマで研究が続き、その成果は朝倉農協だよりに連載している。

この会の活動が影響したと思える宮ノ前奥町内会誌『木の丸の里』ができたし、長宗我部地検帳から家系さがしも行われ始めた。著えられた力と、新しい人の参加によって、一日も早く活動が再開されることを望んでいる。

朝倉城跡調査

（同会　世話人）

くんてき会館

中地　丈夫

薫的神社の御祭神は瑞応寺第十七世住職薫的和上である。長宗我部元親が両親の菩提を弔うために創建した曹洞宗の禅寺であるが、明治四年の排仏棄釈により廃寺となり、神社に改め洞ヶ島神社と称するようになった。薫的神社と改称したのは昭和二十四年である。境内に通夜殿が落成したのは明治三十四年、七十年後の昭和四十六年に建て直したのが現在のくんてき会館である。

この建物は、御祭神の月例祭、所謂おつやに信者が泊り込むために使用されるもので、建坪は八十坪、間口四間半、奥行二間の舞台に楽屋と花道がついている。客席は九十畳。くんてき会館は、神賑行事の他に、地域の人々の娯楽や慰安に開放し、開館以来種々の利用がされてきた。

戦後についていえば、昭和三十五年頃までは旅廻りの一座がひんぱんに興行を打ち、観客をあつめた。殿井新太郎、嵐勇次郎、玉川成太郎、三益大作、南条美智子、羽田喬、暁洋子、関西太郎、博多淡海、浅香光代などである。

それ以降になると、替わってアマチュア劇団が台頭してきた。くんてき会館は、使い方が自由で、一日一万五千円と使用料が安く、観客も満席で二百名と集まりやすい規模で、周辺の人々も催しに対し理解と関心をもっている。なによりも、市内に演者と観客が膝を接してふれあう小劇場が無いだけにユニークな存在である。

よく使用する劇団は、かかし座、ゆまにて、笛の会、演劇センター'90、高知こども劇場などである。ここで力をつけて中央部に出て行ったところもあるが、演劇センター'90のように、大衆芝居にうってつけの会場と、年二回の定例公演を続けているところもある。その他にはコンサート、演説会、日舞の稽古などによく利用されている。

（薫的神社　宮司）

連絡先　⑫２６５１

風伯

とことんの論議を

われわれの住むまちを、文化の香り高い魅力ある都市にすることは、多くの市民のねがいである。香り高くありたいのは、文化だけでなく教育もまたそうだし、生き生きとした活性的な都市にすることもである。

個性的な文化を発展させるには、二つのことが必要である。一つは優れた芸術や学問を生み出す創造的な側面であり、いまひとつは草の根の文化である。つまり時代の先端を歩いて花開くプロフェッショナルな文化と、広く大勢のアマチュアや市民が参加して育てる文化の双方である。

このどちらが不在であってもいけない。観賞する人のいない展覧会や音楽会がありえないように、高い水準のプロの文化にも、それをとり囲む草の根の文化がなくてはならないし、一方草の根の文化も高い目標があってこそ、自分たちの位置をたえず高めようとするのである。間違っても前者だけを文化として考えてはならない。

ところで、誰もが文化人であって不思議がないのが都市である。それ故に都市ではもろもろの文化活動が盛んであって当然である。高知市もまたそうである。しからばそれでよいかというと、そうではない。心ある者は口を開らけば高知市の文化をなんとかしなくては、という。

そこで提案だが、いつまでも議論が「なんとかしなくては……」という総論段階で止まっていては発展がない。この辺で具体論についての大論議を、百家争鳴でとことんやってみてはどうだろうか。

（亜）

経済摩擦と文化度

日米経済摩擦が頂点に来ているという。実際生活上のことでいえば、アメリカの品物を日本人がもっと買ってくれることだそうだ。総理中曽根までがデパートへ出かけ舶来雑貨を買うお手本を示した。ただし総理の買物にもアメリカの品物は入っていなかったそうだというから皮肉である。

そうなんだ。われ〳〵大衆もドイツの機械小物や、フランス、イタリア、イギリスの服飾品は買っても、アメリカのものは殆ど買わない。せい〳〵でジーパンくらいだろう。食品類はどうか、先づ目につく大衆食品密柑だが、色明く甘味にはちがいないが、日本人の微妙な舌を満足さすものではない。牛肉にしたって、大味で日本人向きでない。

日本人は少々安くてもそうしたものは受けつけないのだ。つまり経済摩擦の根本的な原因は、文化度の差によるものだ。三、四年前アメリカの経済顧問のような人物がやってきて、奇しくも「経済問題解決の道は日本人の文化を変えることだ」といった。しかしそれこそ無理な押しつけである。むしろアメリカが日本庶民の伝統文化を理解するところからことは始まるのだ。

ただしそうは言い乍らも、ここでのわれわれの反省は目下アメリカナイズされかかっている庶民の伝統感覚を回復し、守ることを心がけることである。いやはや、これでは一向に経済摩擦の解決には程遠い。だが仕方はない、日本が日本でなくなったらおしまいだからナ。

（呆）

新しい高知文化の創造に あなたの積極的参加を

郷土について考え、より望ましいあり方を模索するためには、百の議論よりも一つの実践が効果的です。映像で、建築で、音楽で、腕をふるっていただくために、財団では次の三つの公募事業を行います。それぞれ得意な分野でご応募ください。なお、応募票等については、ご請求ください。

問い合わせは
電話 73-4365まで

高知の映像コンテスト

テーマ ―高知に関係するもの―
祭り／曜市／まちの景観、美観／河川／生活の中の文化／コミュニティ活動／高知の見どころ、旧跡

応募資格
制限なし（個人でもグループでも可）

作品受付
昭和六十一年一月六日～一月二十日

入選発表
昭和六十一年二月上旬

応募規定
――〈ビデオの部〉――
○三分以上十五分以内の、二分の一インチテープ（VHS、ベータ方式）もしくは八ミリビデオの作品
○未発表のもの
○応募点数に制限はありませんが、一作品を一本のテープにまとめること

賞
特賞（一点）賞状と賞金十万円
入賞（五点）賞状と賞金二万円

備考
○応募作品は返却しません
○作品に他人の著作物等を使用するときは著作権法に注意してください。
――〈写真の部〉――
○六ツ切りの作品に限る（組写真も一枚が六ツ切りであること）
○未発表のもの

賞
入選（二十点）賞状と賞金一万円
※ネガを提出していただきます

備考
○応募作品は返却しません

高知市都市美デザイン賞

対象
昭和六十年一月一日から十二月末日までに高知市内で作られた建築物、建造物で、次のいずれかに該当するもの
(1) 新しい都市美創出のモデルとなるもの
(2) 壁画、彫刻、その他これに類するもので文化的、芸術的環境をつくりあげているもの
(3) 総合的に計画された建築群で良好な町並みの景観を作りあげているもの
(4) 周辺地域のシンボルとなるもの

表彰 特賞一点 入賞二点
＊発注者に賞状と表彰銘板を、設計者に賞状と副賞をおくります

審査 県内および中央の都市計画、建築、文化等の専門家、学識経験者による審査委員会で審査します。委員の氏名は公表しません

応募方法
自薦他薦は問いませんが、所定の様式による書類が必要です

受付期間
昭和六十一年一月六日～一月二十日

入選発表
昭和六十一年二月下旬

「龍馬のうた」の作曲演奏

龍馬のうたの歌詞部門の入選作を作曲、演奏してください。歌詞集は実費三百円（郵送費とも）で財団でおわけしています。

応募資格 特にありません

締め切り 六月十五日 必着のこと

入選発表 七月上旬

賞および表彰
龍馬のうた大賞 十万円（一点）
龍馬のうた金賞 五万円（二点）
入選 二万円（五点）
＊大賞および金賞は、自作自演部門の既入選作十五点を含め、龍馬音楽祭で選考、表彰します

応募方法
作曲、演奏した作品を音楽用カセットテープに録音して送ってください（できれば楽譜も添付のこと）

備考
○応募作品は返却しません
○入選作品の著作権は主催者に属し、レコード化することがあります

龍馬音楽祭

七月十四日（日）
県民文化ホール（オレンジ）

高知県方言辞典

限定予約募集中（昭和60年7月末日まで 財団または各書店で受付け）

定価 6,000円　予約特価 5,000円

高知市文化振興事業団
発足記念出版

特徴
古語から現代語にいたるまでの土佐方言約14,000語を網羅。県下全域にわたって現地協力者を得て、あらゆる日常方言を蒐集。見出し語にアクセント記号を付し、例文を示し、注釈を加えた。方言学者土居重俊、浜田数義両氏の半生にわたる調査研究の集大成。画期的業績。

造本・体裁　A5版・上製・貼函入・約750頁

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780 高知市本町五丁目一番三十号
TEL（〇八八）㉓四三六五
郵便振替 徳島8-14869